武蔵野日曜集会

無化身
――ピリピ書第2章1～18節――

１９９２年３月29日（武蔵野）
小池辰雄

キリストに在って　一つキリストでいけ　聖霊は一つ　愛はすべて神より　無化身　無化者
「○に十」の印（聖霊と十字架）　無即無限無量　神の瑕だらけの子

【ピリピ2】

1この故に若しキリストによる勧、愛による慰安、御霊の交際、また憐憫
と慈悲とあらば、2なんじら念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思う
ことを一つにして、我が喜悦を充しめよ。3何事にまれ、徒党また虚栄のた
めにすな、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりとせよ。4おのおの己が
事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。5汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。
6即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わ
ず、7反って己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。8既に人の状に
て現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。
9この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜いたり。10これ
天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉とくイエスの名により
て膝を屈め、11且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあら
わして、栄光を父なる神に帰せん為なり。
12されば我が愛する者よ、なんじら常に服いしごとく、我が居る時のみな
らず、我が居らぬ今もますます服い、畏れ戦きて己が救を全うせよ。13神は
御意を成さんために汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行わ
しめ給えばなり。14なんじら呟かず疑わずして、凡ての事をおこなえ。15是な
んじら責むべき所なく素直にして、此の曲れる邪悪なる時代に在りて神の瑕
なき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代
に輝く。16かくて我が走りしところ労せしところ空しからず、キリストの日
にわれ誇ることを得ん。17さらば汝らの信仰の供物と祭とに加えて、我が血
を灌ぐとも我は喜ばん、なんじら衆と共に喜ばん。18かく汝等もよろこべ、
我とともに喜べ。

●キリストに在って

パウロは時々、非常に細かい事を言いだす。いろんな人がいるものだから、しょうがないでしょう。日本語の訳で

「キリストによる勧め」

という言い方は、パウロのギリシア語の原文では、

「キリストに在っての勧め」

と、「エン」「の中での」という言い方になっている。「による」という言い方は、一種の手段になる。手段とばかりは言えませんけれども。「に在っての」という、「エン」「イン」です。「イン・クライスト」という、この「イン」が非常に大事です。我々の信交は、この「イン」の「信交」であって、「による」の信仰ではない。

我々は空気の中で――空気によってではない――空気の中で生きている。空気に囲まれて、空気を吸って、空気と離れるわけにいかない。私はいつも、大気のことを思うんです。どこにいようと、我々の生命は大気と絶対に離れない。水は飲まないかもしれない。しかし、空気は吸わないでは生きていられない。この肉体がいかに空気と密接な関係にあるか。我々の魂がキリストの中になければ、キリストが私たちの中にいなければ、信仰なんていったってダメなんです。だから、私は「しんこう」の「こう」の字は、仰（信仰）とは書かない。交（信交）と書く。旧来の観念をぶち破る。こんなことを言う人は、どこにも恐らくいないでしょう。しょうがない、私はそれでなければ生きていられないんだから。

●一つキリストでいけ

今日の題は――こんな題は初めてだ――「無化身」という。

1この故に若しキリストによる勧、愛による慰安、

これは意訳だから、「による」というギリシア語はない。「愛の慰安」です。日本語の訳はまだるっこくて、私は自分の訳を本当はつくりたいんだけれども、そんな暇はない。

御霊の交際、また憐憫と慈悲とあらば、

パウロは、「ならば」という仮定的な言い方をよくやる。「ならば」では本当は困るんだよな。

「愛にあるであろう。だから」

と、そういう言い方にならなければ。ここのところは、もちろん「ならば」というギリシア語ですけれども。いわゆるお説教調子がパウロにもちょっとある。

2なんじら念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思うことを一つにして、
我が喜悦を充しめよ。

「同じうし」でもいいです。ここは名詞で書いてある。「同じ愛、同じ思いで」ということ。

「念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思うことを一つにして」

と。

「どうやったら同じになるか？」

と思うでしょ。これをあまり文字通りとると、全体主義になる。みな同じになってしまって、ひとつもおもろしみがない。聖書の言葉にもとらわれてはダメですよ。パウロの言葉は本当はどういう現実なんだろう。「一つ」とか、「同じうし」とか。みな、顔が違うんだ。考えも違う、言い方も違う。いいですよ、それで。私は、違った方がいいと思っている。現象面は違うのが、実は本当なんだ。太陽の同じ光がきて、花はみな同じですか。そうじゃないでしょ。百花繚乱という。桜の花でも色んな種類がある。

パウロの奥を読むと実は、「同じうし」ではないんだ、本当は。同じキリストなんだ。

「同じキリストで思え。同じキリストで愛せよ。同じキリストの心でいけ。そうすれば、現象面はそれぞれでいい。お前さんたちの人真似は要らん。あなた方は、自分の正直な在り方でいけ。ただ、根本はキリストという一つだぞ」

と。パウロのここの言葉を読んでいて、そこにこなければ、私はこのパウロの言葉は承知しない。

「一つキリスト、同じキリストでいけ」

ということです。

●聖霊は一つ

「一つキリスト、同じキリストでいく」

ためには、もう一つ焦点がある。それは聖霊です。

「聖霊は一つ、キリストはひとり、神はひとり」

と。エペソ書にそれがでてくる。

「キリストの十字架は一つ」

これが根拠になっていれば、これが本ものならば、現れ方はそれぞれでよろしい。現象面を一生懸命で考えていたらダメです。神さまの愛し方もそうなんだ。昨日の愛し方と、今日の愛し方とは違う。甲の人への愛と、乙の人への愛は、現象は違う。その違った現象を見て、

「どうもこれは不公平だ」

と思うのはそもそも大間違い。一人一人にのっぴきならない事をしていらっしゃる。比較研究は要らん。人格というのは、そういうようにして顧みられている。我々一人一人は相対的な存在でありながら、神に在っては絶対なんです。人格は比較ができない。みな顔が違う。神さまは最大の芸術家だから、同じものは造らない。

これで、あなた方も、ここのところが楽しくなるでしょ。聖書を読んでいて、本当の意味で楽しくならなければダメなんだ、「大変だなぁ」なんて思っていたら。ちっとも、大変じゃない。

「思いの根拠は一つ。心の根拠は一つ、愛の根拠も一つです。現れ方は様々で結構ですよ」

ということだ。本当の「コイノニア」「交わり」というのはそういうものだ。

「あの人は、甲の人にはああいうようにしたが、乙の人にはこうした」

なんて、下らない事を考えないこと。

「それぞれがそれぞれの愛し方で結構でございます」

と。それが、本当の自由の世界なんですよ。とらわれない世界。何々主義でもって固まったものは、みなダメなんだ。主義そのものには、それぞれのよさがあります。けれども、決してそれは絶対ではない。

このあいだ、孫の卒業式で東大に行ったが、総長はなかなかいい話をしました。

「日本は経済国だけれども、精神的にダメだ。あなた方はそのつもりでしっかりやってくれ」

と。だけれども、私に言わせると、ただ一つを欠く。今の教育には西郷南洲の、

「敬天愛人」

の「敬天」がない。「天を相手にせよ」がない。

「お前たちは天を相手にせよ」

と、それくらいのことを総長が言わなければダメなんだ。上野の南洲の銅像が嘆いているよ、「何ごとか！」と。

パウロは、

「聖霊は一つだが、賜物（たまもの）は様々だ」

ということは、コリント前書12、14章で言っている。

●愛はすべて神より

パウロさんは、とにかく凄いです。キリストを除いては、パウロがいなかったら、新約聖書は成り立たない。それだけ選びの器なんだ。そのパウロが、

「我は罪びとの首（かしら）だ」

と言った。ところが、キリストの直弟子の首になってしまった。私も、ただでは死ねないですよ。世界的な詩を書くから。

3 何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな

あたりまえだ。徒党や虚栄のために為る、そんなのがいるんだね、今の政界にもいる。政界に本当に天を相手としている政治家が一人もいない。

おのおの謙遜をもて互（たがい）に人を己に勝（まさ）れりとせよ

「謙遜」なんていう言葉では足りない。「互に人を己に勝れりとせよ」なんて、そんな比較する必要はない。パウロはこんなことを言ってたらダメだよ。

「互いに人の本当の長所を見ろ」
ということです。自分と比較して、相手が勝っているか劣っているか、そんな事を見るのではない。私は、そんなことを言われると、このパウロの言葉は癪(しゃく)に触るんだ。パウロさんもダメだ、ところどころ。「勝れりとせよ」というのは、普通の道徳の世界だ。
「その人の善さをしっかり見ろ」
ということだ。人間はいろいろあるんだ。その人の、ドロもあれば、いろいろある。けれども、そこにダイヤモンドがある。人の欠点を見るやつはサタン、人の長所を見るのは天使。
「その人のダイヤモンドをしっかり見ろ、そして本当に交わっていけ。お互いに楽しくやっていきましょう」
と。それなら分かるよ。パウロさんはダメだよ、こんな言い方をしたら、ただ「勝れりとせよ」なんて。そんなことをしていたら偽りの謙遜になる。

4 **おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ、**

何を言っているか、パウロは。こういうところを読んでいると、いやになってしまうんだ。こんなことを言っているのは道徳の世界だ。
「自分を顧みるなら、キリストにおいて顧みろ。本当にキリストに生きているか」
ということです。「人のことをも」ではない、
「人のことをしっかり思ってあげなさい」
と。思い遣り、「恕(じょ)」ということです。
「孔子の教えは結局のところ、恕なるかな」
という。その人の立場になって思いやることです。
それは天来の愛があればできる。愛というのはもともと天来のものだ。それが恋愛であろうと何であろうと。恋愛が悪いのではない。藤井先生が「恋愛否定論」なんて書いた。ダメだよ。恋愛は結構じゃないですか。みな、自然の感情だ。神さまから賜っている自然の感情だ。それが本当に神からきている恋愛ならいい。しかし、私(わたくし)されたような恋愛ではダメになる。
「愛はすべて神より出づ」
そのことを本当に自覚していたのがゲーテなんです。だから、ゲーテは次から次へといろんな女性を愛したけれども、彼の愛は決して浮気ではない。若い時はいろいろ躓きもしたろうが、そんな事は一々言う必要はない。

5 **汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。**

原文は、こういう原文ではないけれども、この訳はなかなか素晴らしい。
「キリストの心を心とせよ」
と。これも原文は、
「キリストの中で考えろ」

という言い方になっている。「キリストの中で思え」ということです。

「何か思うならば、キリストの中で思え」

と。これも「エン・クリスト」です。それを、「キリストの心を心とせよ」と訳した人はなかなか面白い。けれども、「キリストの心を心とせよ」といわれると、「さあ、できるか？」ということになる。だから、本当は原文通り、「キリストの中で思え」ということです。

「キリストの中にあって思え。そうすると、キリストの心が心になるよ」

と。なにしろ、中に入らなければダメです、外側では。内接円にならなければ。

●無化身

6即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、7反って己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。8既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。

このピリピ書5章5～8節は凄いところです。私が筵題に、

「無化身」

と書いたのは、この

「己を空しうし」

という、この言葉なんです。「神の貌にて」は

「エン　モルフェー　トゥー　テウー」

という言葉です。やっぱり「エン」なんです。「神の相の人でありましたが」ということ。我々も本当は「神の相」なんです。創世記1章27節の

「人を神の相に即して造った」

と。あれは「似姿」ではない。「即して」という言い方がいい。「似た」ではない。即如です。「神の相」とは、ではどういう相かというと分からない。神さまは無相なんです。相が無い。「無相の相」なんだ。「無相の相」だけれども、その神さまの相なき相、その内容です。その質に神の質に、無相の相に人間を即して造った。

「ヴェ　ツェレム　エロヒーム」

という「ヴェ」というのがそのことです。「似ている」ではない。神の相に即して造られた。我々は本来、神相、神の相なんだ。人間はみな「仏性」がある。仏の性がある。神の相がある。「仏」と言おうが、「神」と言おうがいい。要するに、絶対者の相に、本当は、そのように造られている。

「キリストは神の姿であった」

というのは、そのこと。我々も神の姿である、本来は。ところが、神さまの言うことを聞かないで、追い出されてしまった。楽園喪失。あの神話は素晴らしい。あの神話の内容は、我々の現実がそのまま神話になっている。神からそれてしまった。ギリシア語の「ハマルテイア」

「罪」という字は、
「的（まと）から外（はず）れる」
ことです。神さまからはずれてしまっているのが「罪」なんです。「罪」という字の本当の意味は、「この思い、かのわざが悪い」ということではない。「それてしまった」ということ。
「神さまからそれてしまった」
こと、それが「罪」の本当の意味なんです。我々は「はずれ者」なんです。神さまの外（はず）れ者。「神の似姿」とは「似ている」ではない。
「ホモウジオス」（同一本質的）
という、即している。「ホモイウジオス」（相似本質的）ではない。あのアタナシウスとアリウスとの戦いがそうなんです。
「キリストは神に似て造られたか。そうじゃない。神と等しく造られた」
と、神学的な争いをして、
「アタナシウスの方が本当だ、アリウスはダメだ」
と、あれがキリスト教の神学史上の非常に大事な問題だった。即するんです。我々も似姿ではない。即神なんです。
だから、仏教の方では、
「本来はそういう仏性があることを悟れ」
という。禅宗の悟りの世界はそこなんだ。ところが、
「そのそれているのがどうにもならん、これはもう本願の恵みによらなくてはならない」
というのが――キリスト道と同じこと――あの仏道の浄土宗、浄土真宗です。我々が親鸞に非常に親しみを感ずるのは、その角度の恵みだからだ。即するなんていって、その修行をしたら大変だよ。

●無化者

6 即ち彼は神の貌（かたち）にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、

彼は神の「モルフェー」「姿」であった。ところが、それを「固く保たんとは思わず」と、それを
「奪われまいとすることを止めて」
という調子の言い方をしている。「固執することを止めて」ということ。

7 反って己を空しうし、僕の貌（かたち）をとりて人の如くなれり。

「ホース　アントローポス」「人の如く」と書いてある。「己を空しうし」というのは、「ケノー」という「空っぽにする」という字です。自分を空っぽにする、空にする、無にする。

だから、「無化（むか）」という。己を無化して、空化して。「空っぽな」という形容詞は、「ケノス」という。自分を空っぽにして、と。だから、

「私は何もできない。神さまの力でやっている。何も教えているんじゃない。神さまが言え、と言うことを言っているだけのはなしだ」

とキリストは言っている。これはヨハネ伝が一番よくそのことを書いている。

キリストは空っぽな人間なんです。無手勝流なんだ。電気（電灯）も中が真空だから光るんでしょ。空気があったら光らない。空っぽだから、その空っぽの中に神さまが入ってきたから、これは大変なことになる。神さまの力が、智慧が、生命が、光が、愛が入ってくる。神さまのもの凄いものがキリストの中に入ってきたから、まぁ大変な霊止（ひと）だ。だから、このマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝で、キリストが言ったりしたりすることはケタが、次元が違う。絶対次元だ。死人まで甦らせるような力を持っている。これはみな神の力なんだ。キリストは、

「私のじゃないよ」

と言う。それがキリストは「無化者（むかしゃ）」なんだ。「無化身（むかしん）」という。無に化している。「無化身」とはキリストのこと。お釈迦さんは如来の「法身」、法の身だ。「ダルマ」。

我々はキリストと同じく「無化身」にはなれない。自分でもって、その境地に入れない。だから、

「お前さんは入れないから、仕方がない、私はお前を無にしてやるぞ」

というのが、十字架ですから。

「十字架で、神外（はず）れから神の中に入れてやった。自己中心から神中心にしてやったぞ」

と。「罪を赦す」とは、ただ罪を赦しているんじゃない。よく「罪を赦す」と言っているが。ただ赦されたってしょうがないんだ。

「罪無き世界に入れてやるぞ」

と。「贖い」「贖罪」というのはそうなんです。「赦す」という言葉は本当は少し弱い。

「赦されても、また罪を犯しますよ」

なんて。我々はみな波みたいな人間だから。けれども、

「その波の奥の静かな世界に入れてやった」

と、これが十字架です。それを本当に受けとると、聖霊が来るんだから仕方がない。

●「○に十」の印（聖霊と十字架）

我々の信交の姿は、――「十」を「○」で囲む――

「○に十」の印（聖霊と十字架）

この聖霊（○）がきてなければダメなんだ。

「聖霊の体験を本当にしました。何だか知らないけれども、非常に楽になりました。相変わらずダメな、躓いたり転んだりするけれども、そんなことは問題でなくなりました」

と言って、それで進んで行かなければ。あり難くて、しょうがない。それが「絶対恩寵」ということ。だから、我々は「無を賜って」いるんだ。「恵無」（恵みの無）、「無恵」（無の恵み）なんだ。無を賜っている「恵無身」なんだ。

「無を恵まれているところの身」

である。「身（からだ）」ということは「存在」ということです。

「賜りたる無」ですから。

「なかなか、無になれません」

なんて、なれっこないよ、無になんか。キリストだけだよ、なったのは。しかし、

「無は賜っています。だから、聖霊がきて力が溢れてしょうがないんです」

と、ハッキリ言えなくては。よく、「お疲れさま」と言うが、私は疲れないんだ。眠くはなったって、疲れません。イザヤ書に、

「走れども疲れず。鷲の如く翼を張って飛び回る」

とあるように、魂は宇宙を飛び回っているんだ。

人間は本来、宗教人なんです、魂があることは。神仏の世界に連ならなければいられないはずなんです。それを、連なっていないのを「罪」という。「神外れ（はず）」を「罪」という。それを、神外れから、またつなげてくださったのがキリストなんだ。

「己を空しうし」と、自分を何ものともしないで「父よ」と――「主さま」と私たちがいうのはそのことなんです。「僕」の姿です。僕のときは、相手は「主」だから――キリストにとって、神さまは「主」であり「父」である。キリストはしょっちゅう、「主よ」と言わないで、「父よ」と言っているけれども。

8 既に人の状（さま）にて現れ、己を卑（ひく）うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順（したが）い給えり。

「己を卑（ひく）うして」とは平伏しの姿です。

「わが受くべきバプテスマ

とキリストが言われた――ルカ伝12章49節――キリストの「受くべきバプテスマ」とは十字架のこと。即ち、己の血でもって自分を洗ってしまったんだから、大変なことだ。河の水ではない。それが「受くべきバプテスマ」なんだ。

「思い迫ること如何ばかりぞや」

とはそのこと。

「そうしたらば、お前たちに火を投ずる」

とは聖霊のことです。

「**我は地に火を投ぜんために来たれり。されど、我に受くべきバプテスマあり**」とは十字架です。

●無即無限無量

9この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜いたり。10これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉とくイエスの名によりて膝を屈め、

これも「イエスの名にあって」です、「によって」ではない。

11且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。

11節までみな大事です。その通りです。パウロが言葉を極めて書いた。

「イエス・キリストは主なり」

だから、私たちは、

「主さま」

と言っているわけだ。「主」というのは「贖い主」の「主」です。私たちが「主さま」という時には、「贖い主さま」なんだ。無をくださった方、無限無量をくださった方です。

「無即無限無量の事態をいただきました。ありがとうございます。それでいきます」と。だから、力が来てしょうがない。そういう霊止になってくださいよ。私みたいな元来の弱虫がどうしてこんなに力強くされたか。それは聖霊の力です。よく聞かれるんだ、

「先生は風邪ひきませんね」

と。

「いや、風邪の方で逃げていくよ」

という。それ位の気持でいてくださいよ。

12されば我が愛する者よ、なんじら常に服いしごとく、我が居る時のみならず、我が居らぬ今もますます服い、畏れ戦きて己が救を全うせよ。

「畏れ戦きて」というのは、恐がることではない。本当に神の前に平伏す。

「畏れをもて口づけする」

という言葉がある。この「畏れ」は恐れと書いては、冗談じゃない。「畏れかしこむ」という字だ。「畏敬」「畏れ敬う」というが、「恐敬」なんて言わない。「畏愛」だっていい、畏れ愛する。

よく、讃美歌で「雪よりも白くしてください」とか「潔めたまえ」とか、どうも私はあいう讃美歌はピンと来ない。現在完了でいかなければいけない。恵みはこれからではない。完了しているんです、常に新たに。常に新たに完了して進んでいく。「贖いたまえ」ではない。「贖ってくださっている」んです。内側から潔めてくださっている。「聖」という字は、

「神さまの者になっている」

ということ。「聖」「清」の字は、「聖・俗」「清・濁」の相対の概念ではない。恵みの絶対の概念です。我々はみな「聖徒」なんです。この「聖徒」はいわゆる「聖人」ではない。カトリックでいう、「聖者の中に入れる」という、あの「聖」ではない。我々は「聖徒」とは、

「キリストに聖を賜った者、天国人」

ということです。だから、

「廓然無聖」

という。「広々として、聖だとか俗だとかを考えていない」という。禅宗の素晴らしい言葉です。

「枯木竜吟」

「枯れた木が風を受けて竜の如く鳴っている」、瓢々たるかな、という。「瓢」という字は本当に「竜」の姿だね。

●神の瑕だらけの子

13 神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行わしめ給えばなり。

「汝らの衷にはたらき」と、これは大変結構ですね。「汝等をして志望をたて」と。

「ボーイズ　ビー　アムビシャス　イン　クライスト」

(Boys, be ambitious in Christ)

「青年よ、キリストに在って大志を持て」

と、神に在っての志なんで、それは神の栄光をあらわす。福音を身証する。何をやっていても。それが本当の生き方だ。そういう本当の生き方の角度がないものだから、みんな疲れたり、くたびれたり、飽きてしまったり。ダメなんだ、それでは。事実が証明する。本当の根源を持たないと、みんなダメになる。自分がしているのではない。みんなキリストの力でするだけの話。だから、

「汝等をして志望をたてしめ、業を行わしめ」

と、みんなそうなんです、神さまがさせるから。

14 なんじら呟かず疑わずして、凡ての事をおこなえ。

そんな「つぶやいたり、疑ったり」なんかするか。

15 是なんじら責むべき所なく素直にして、此の曲れる邪悪なる時代に在りて神の瑕なき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。

傷だらけでいいよ。

「傷だらけだけれども、どっこい、その傷には負けていません」

と。むしろ、戦いのために、傷は大いに負わなければダメなんだ。

「御前に出づる時に傷がなかったら申し訳けない」

というような歌すらある。天国に往く時には傷だらけで往くわけだ。それは戦いの印だ。パウロが、時々、完璧なような事を言うから困るよ。パウロ自身が、本当は傷だらけなんだ。

「神の瑕なき子」は、「神の瑕だらけの子」として、世の光としてこの時代に輝く。「如く」という言葉は、本当は「らしく」と言った方がいい。「世の光らしく」と。「キリストの日」というのは再臨のことです。

「キリストがもう直いらっしゃる」

と彼らは本当に思っていた。「再臨信仰」、いつかひっくり返って歴史の終りになるという。けれども、「再臨」よりも大事なことは何ですか。「現在」ということ。現に在している。キリストは現在している。現在しているキリストを相手にしているんだから。

「見えるひとの如くにキリストに会っている」

というわけだ。現在している。

16かくて我が走りしところ労せしところ空しからず、キリストの日にわれ誇ることを得ん。

パウロは「誇る」という言葉が好きだ。キリストを誇るので、

「お陰さまで、そういうことになりますよ。正直、私は命懸けでやりました」

と。パウロは本当に文字通り命懸けでやった。

17さらば汝らの信仰の供物と祭とに加えて、我が血を灌ぐとも我は喜ばん、なんじら衆と共に喜ばん。

「血を灌ぐ」、殉道の死を遂げる。

18かく汝等もよろこべ、我とともに喜べ。

「我とともに喜べ、よろこべ」

と、たたみかけて書いてある。ピリピ書は「喜びの書翰」といわれている。キリストに在って勝つから、その勝利を喜んでいるわけだ。「歌いつつ歩まん」というわけだ。

「畏れ戦きて己が救を全うせよ」

の「救いを全うせよ」とは、

「キリストに本当に贖われて聖霊を受ける、その事態を全からしめよ。本当にその恵みを受けていけ、貫け」

ということです。

「救われていることを貫け」

でもいい。

「まだ私は救われているんでしょうか？」

と、そんなことではないんだ。